

「エコライフ」という生活者価値

手づくり生活のエコロジー

歌野 敬

Written by Kei Uiano

都市のもつ理不尽さ

過日、熊本の実家に帰り、庭木の手入れをやった。庭木といってもただかたか八十坪の屋敷の庭で、大した木があるわけではない。老いた母の一人住まい、手が回らないので剪定だけでなく、後の管理を考え、数本は伐採し、すっきりしたいと母の意向であった。

持参の手電動ソーで梅や椿の大枝を大胆に切り、小枝を剪定鋏で整理していく。剣山のよつに生い茂った南天など灌木類は数本に整え、邪魔になった木には可哀相だが三本ほど成仏してもらった(もつとも春にはまた新芽が出よう)。剪定・伐採作業は三〇分もかからなかった。でも狭い庭地は見る間に木々端類で埋まってしまう。

問題はその処理である。放置するわけにはいかないのももちろんだが、捨てる場所などはない。やむなく都会のしきりに従い、幹・大枝・小枝を切り分け、枝葉を二十から三十センチのサイズに丁寧に切り揃えて束ね、不揃いの枝や落ち葉はビニール袋に押し込んでいく。実に手間のかかる作業だ。一時間ほどで何とか半分近く処理したものの、暑気に堪え難く、これも持つてきた軽トラの荷台に束ねたものも含め積み込むことにした。ごみステーションに持つていくには量が過ぎる。十センチ以上はある幹はとも引取ってもらえそうにない。と考えての上でもある。幸い市のごみ焼却場は近場であり、以前直接持ち込んだ経験があるからだ。有料だが仕方がない。翌日焼却場に持ち込んだ。お代は八百円であった。

ところで、私自身はいま五島列島の山中で自給生活を送っている。風呂は当然薪。だから焼

却場に持ち込んだ木端類はれっきとした燃料である。また屑の枝葉はそのまま積んでおけば堆肥となつて樹木の肥料になる。ついでに風呂で燃やした消し炭は木炭の着火材兼燃料、残る灰は畑の貴重な肥料であり、使い方によつては畑の防虫薬として重宝する。そんな価値を持つ木端類を、わざわざ手間かけて処理し、挙げ句の果ては燃やしてしまうというのは、とても理不尽な行為以外ではないのである。

というふうと考えていくと、都会生活はこの種の理不尽さに溢れている。毎日出るおびただしい生活ごみ・生ごみもそうだし、風呂に厨房に移動に化石燃料をがぶ飲みし、トイレにいまも習慣化しているのだから(朝シャンに真水を浪費し、室内を冷やす代わりに熱気を排出するエアコンはじめ電気製品を家中にあふれさせて電力エネルギーを無駄食いし)ばかりか手足と頭脳を無限に退化させてもいる、数多の

使い捨て商品で暴力的資源収奪に手を貸し…
 などきりが無い非難になるが、ミヤコロボの響感を
 買いそうだからこれくらいにしよう。いずれ
 にしろ、私にとってこみ収集場でみかける植栽
 屑は、都会の持つ歪みの象徴にほかならなかつた
 のであり、今回身をもってこれを追体験したわ
 けである。

「エコライフ」からみえるもの

さてかかる私の暴言が根拠を持つのは、衣・食・
 住からエネルギーまで可能な限りの自給」とい
 うばかばかしくも楽しいテーマを、この十八年掲
 げ暮らしてきた日常感覚ゆえである。その内実
 をざっと紹介してみよう。

食。 田一反半(十五アール)にうるち・もち米。
 畑三反程に大麦・小麦・大豆類からそれこそあ
 らゆる野菜。コン・マク芋からラッキョ、各種ハーブ
 に至るまで、たとえば全体を想像いただけると
 るつか。裏山には十数種の果樹にお茶、樹間
 に椎茸など。家畜は豚・鶏。豚は自給用だけで
 なく、月一回八ムに加工して販売している。自給
 加工品はその他、味噌・醤油から椿油、ビール・濁
 酒・焼酎・鯉節、調味料など多種多様。食に關し
 ては、加工品原料も含め自給率九割を越す。
住。 これは大工技術のことで、これまで知り
 合いの大工に来てもらい新增改築を繰り返して
 きたから在来工法は一通り学び、小屋掛けな
 どは手軽にできるようになった。間伐材と廃材

利用である。

衣。これは難関だ。綿を栽培して収穫してあ
 るが、糸を紡いで織るといのは気が遠くなる
 作業で、今のところリフォームが精一杯。産業革
 命が繊維産業から起こったのは十分に理のある

ことだと納得した。

最後のエネルギー。薪炭のフル活用で、風呂は
 天日と薪、厨房は木炭七厘とガスの併用、暖房
 は木炭の掘り炬燵・火鉢。電気も本格風車を
 手づくりして試行、電気を我がものにできるこ
 とは実証したものの、風速五十メートルを越え



釜煎り茶の手もみ



椿油絞りの1工程



田植え



蒸留中のイモ焼酎

「エコライフ」という生活者価値

る台風にあえなく破壊。谷あいの地形ゆえ安定した風力が得られないことも分かった。改修は見合わせていまに至る(ここで急いで断つておくと、エアコンも電子レンジも無い我が家では、電力への依存度は平均よりかなり低いと思う)。もうひとつの難関エネルギーである石油類は、農機燃料を含め代替物をもって抵抗する術がなく、スタンドにお世話になるしかない。

蛇足ながら、飲用水は山清水、トイレはむろん汲み取り式で尿は肥料とする。

以上が自給生活の概要である。既存の経済社会システムからできるだけ自立できる暮らし。こうして可能な限りの手づくり生活を送っていると、都の暮らしが際限のない「無駄」によって成立しているのが見えてくる。先の植栽屑の使用価値を無視するのも大いなる無駄。街を歩く若者たちの両手にあるPETボトルと携帯電話は、いずれもごみ処理にへらばうな負荷を与え、無駄を強いている(携帯電話は中継塔ともども、傍若無人さ、風景や人品の破壊度、あるいは健康への影響度において、この社会の癌組織だ)。あるいは私は入ったことがないが百円ショップなるもの。体験談を聞けば、ほとんどは不必要なものを買わされているとしか思えない。ただ安いから得をした気分を味わっているにすぎない。これなど資源の無駄以外ではあるまい。

自給生活を志向した私の動機のひとつは、暮らしの身の周りにある圧倒的な物財の中で、本当に必要なものがどれだけあるのだろうかとの疑問にあるときとらえられたからだ。あまりにも無駄なものを持ち過ぎてはいらないか。なら

ば暮らしの必需品を徹底選別し、自給する術を実践することは優れて現代的課題ではないかと考えた。その過程で見えてきたものは数限りないが、本稿のテーマに則してひとつ挙げれば、「便利さを装って出てくる商品は曲者」なるテーマ。何だつていい。先のPETボトルや携帯電話もその類。布おむつは何度でも使えるのにこれも短時日に紙おむつが駆逐してしまった。結果石油とパルプの浪費がどれだけ進んだだろう。料理をしなくてすむ惣菜・弁当類の氾濫は、家庭の味を過去のものにしてしまった。これは食文化の、そして味覚という個人のアイデンティティの破壊である。ちよいと便利なものは家電製品に多い。食器洗い機や全自動洗濯機などの手抜き機、ホットプレートなどは無くてもちうとも困らないもの。そんなものが世の中にはあふれている。

家畜化しないために

少しきつい言い方だけど、私は少し考えれば無駄で不要なものに、安さにつられてつい手を出してしまう人を「家畜化した人間」と呼んでいる。主体的な思考を放棄し、詐欺まがいの広告にだまされて購買行動に走るのには家畜と同じだ。ひどい健康食品ブームなども家畜の増加と符合していると考えなければ理解できない。ともあれ、過剰消費社会に繰り出される新商品は、まず眉唾物と疑ってかかること、これが家

畜化しない第一歩である。

エコシカルな暮らしとは、一義的には大量生産・大量消費・大量廃棄の網の目からいかに逃れるかだと思っている。今のところ私にとって自給的暮らしがその解答だ。都会でも類した流儀は一定程度買けるだろうし、逆に田舎でも消費一辺倒の困った人も少なくない。でもいろいろ工夫しながら手づくりする生産文化が、山里や私の住む辺境の島には残っているし、何より生産と消費が融合し、そこに介在する物質の過半が循環する環境がなければ、本当のエコシカルな暮らしは実現できないと思う。田舎暮らしを勧める所以である。

シャンプーや石鹸、歯磨き、化粧品などの大手メーカーの技術者である娘の知人が我が家を訪れ、「暮らしに必要なものを作っていると自負してきたのに自信を失った」と感想を漏らした。石鹸は廃油石鹸、歯磨き粉は天然塩という具合だからだ。またある知人は、空気のような「コロジー」と一週間の体験を総括した。いずれも我が暮らしに対する賛辞だと思っている。

◆ 歌野 敬(うたの・けい)

田舎暮らしネットワーク世話人。一九五一年熊本生まれ。田舎暮らしの経験から田舎暮らし希望者へのサポート活動を展開。ネットワーク化。主な著書は、『ぼくらは中年開拓団・五島列島から田舎暮らしをしたい人』、『風車よまわれ』(こちんちも連合出版)。田舎暮らしの論理(葦書房)など。